



森山幹事長が中友会と懇談 日中民間交流を後押し



左から段躍中日本僑報社代表、森山裕幹事長、林家三平中友会会長、段景子日本僑報社社長

2025年5月21日、中友会の活動の一環として、林家三平会長・日本僑報社代表の段躍中氏ら一行は、自民党幹事長・森山裕先生への表敬会談を行うために国会を訪問しました。

この訪問は、日中民間交流の深化を目的とした中友会の活動の一環として行われたもので、森山幹事長には、

昨年12月に開催された第7回「忘れられない中国滞在エピソード」表彰式のご出席など、中友会の活動に対する多大なるご支援とご指導への御礼を申し上げたほか、森山幹事長が最近北京を訪問されたことについてもお話を伺いました。

■「無人農業の進展に驚いた」——中国最新事情に関心

会談の中で、森山幹事長は訪中体験について語り、特に湖南省長沙市で目の当たりにした無人農業の先端技術に深い感銘を受けたことを紹介し、「日本の田んぼの平均が3アールであるのに対し、向こうの広大な水田とオートメーションには驚いた」と率直な感想を述べられました。

また、長沙市がこの10年間で毎年30万人、合計300万人以上の人口増が続けていることに触れ、「3万人かと思っていました」と驚きの声を漏らされました。

■初訪中、そして長沙との半世紀にわたる縁

森山幹事長は、約40年前に長沙市を初めて訪れた経験についても語られました。当時、鹿児島市議会議員として長沙市との姉妹都市提携に尽力し、その後、参議院議員、財務副大臣として日本の最後の円借款を長沙に提供する役割も果たしました。

「当時の市長は熊清泉氏であったと記憶しております。歴史ある都市としての長沙、そして鹿児島との特別な関係があることを実感しました。

その後、円借款によって環境整備や導水事業が進み、今日の発展の基礎になったとすれば、本当に嬉しいことです。」

また、自らが長沙市の名誉市民となったことへの感謝も語り、「長沙の夜の街は本当に美しい。歩道の雑草一本生えていないことに感動した」と、冗談を交えて語りました。

■「記録は永遠に残る」——昨年の表彰式での力強いメッセージ

昨年12月27日、中華人民共和国駐日本大使館で開催された第7回「忘れられない中国滞在エピソード」表彰式では、森山幹事長は主催者と受賞者に対し、次のように心からのメッセージを贈ってくださいました。

「文字で記録を残すということほど、大事なことはないと思います。

皆さんがエピソードとしてお書きくださったものは、永遠に残っていくだろうと思います。

まさに中国と日本の交流が、さらに深まっていく原点になるのではないか、そう思っております。」

さらに、自身の政治人生の原点にもなった鹿児島・長沙の交流史に触れながら、地方レベルから始まる民間交流の重要性を再確認する場となったと述べられました。

■「日中の理解を深める貴重な機会」——未来への応援

会談の締めくくりに、森山幹事長は中友会と日本僑報社の活動に対して、力強い励ましの言葉をいただきました。

「『忘れられない中国滞在エピソード』のような取り組みは、日中の理解を深める貴重な機会です。どうぞこれからも頑張ってください。私も応援しています。」

この対話は、過去を振り返りつつ未来を見据える大切な節目となり、日中民間交流の次の一步を後押しする、心温まるひとときとなりました。



歓談に興じる森山裕幹事長（写真中央）



中友会会員による
中国滞在体験談

私の中国物語

「私の中国物語」その①

中国で人生初のご近所付き合い

主婦 金丸 利枝

2012年6月、私は中国湖北省武漢市の空港に初めて降りた。夫の転勤先に帯同家族としてやって来たのだ。

空港から自宅へ向かうタクシーの車窓から見える武漢の街は、何処も大勢の人で溢れ返り雑然とした雰囲気、これから自分は本当にこの場所でやっていけるのだろうかかと不安になったのを今でも覚えている。

到着して数日はビザの手続きなどの為、数箇所の行政事務所を訪れた。係員との面接は、自分のことであるにも関わらず、全て通訳の方任せで、私自身は蚊帳の外状態。何とも切ない気持ちになったものである。

こうして始まった、知り合いもいなければ言葉も全く分からない異国の地での生活は、スーパーに生活必需品を買いに行く以外は、これといった用事もなく、夫が仕事から戻るまでは、全く誰とも話すことはないという毎日で、何とかこの状態を抜け出さねばと日々悶々としていた。

そんなある日、アパートの同じ棟に住む大家さんが訪ねて来た。用件を中国語で言われるのだが全く見当もつかず、わざわざ来てもらったのに申し訳ないやら情け無いやら。苦し紛れにノートとペンを差し出し用件を書いてももらった。書いてもらったことで用件の大半は察しがついた。この時ほど漢字を知っていて良かったと思ったことはない。

書けば理解出来るのだと思ってもらえたせいか、続けて大家さんは、毎朝ご近所さんでやっている朝の体操に誘ってくれた。言葉の分からない人たちの中へいきなり入っていった大丈夫なのか迷ったが、ここで飛び込んでいかないとずっと誰とも話さない生活からは抜け出せないと思い、思い切って参加させてもらうことにした。

翌朝7時に大家さんに教えてもらったアパートの中庭に行くと、数人の女性たちが集まって談笑していた。大家さんが私をみんなに紹介してくれ、みんな私に質問してきたようだが何を言っているかは全く分からず、はにかんでみせるしかなかった。

翌日からはノートとペンを持って体操に行くようにした。何か言いたいことがあれば書いて示し、相手側も書いて答えてくれることで全く意思疎通が出来ないという状況からは免れた。と言っても、彼女たちが話していることが全く分からないという事に変わりはない。毎朝、集合して体操が始まるまでしばらく雑談するのが常なのだが、この時間が私にとっては、かなり辛かった。全く理解出来ない言葉で話される会話をじっと横で聞いている。内容も全く分からないので、いつ頃終わって体操を始めるのか、検討さえつかない。ただただ我慢してじっと待つしかなく、時には心の中で「いい加減にしろー！」と悪態をつく事もあった。

その一方、当然ながら毎日顔を合わせているうちに、彼女たちには特別な親近感を覚えるようになった。私は



蘇州大学海外教育学院中国語課程のクラスメイトと

日本では、親から独立して以降はご近所付き合いなるものをした事がなかった。かくして、私の人生初のご近所仲間は中国武漢の方々となったのである。

その後、中国語のレッスンも受けるようになり、彼女たちの会話にもほんの少しずつだが加わるようになっていった。ただし、私が話そうとすると発音が悪く何と言っているのか聞き取ってもらえないし、相手が言っていることも結局分からないしで、会話という会話にもならず申し訳ない気持ちになることが多々あった。そんなある日、一人が「自分たちが武漢なまりで話さなければ、利枝は私たちが言っていることが分かるんじゃないの?」と言ってくれたことがあった。当時の私の中国語力は標準中国語と方言の違いを聞き分けられるレベルではなく、「それは関係ないよ。自分たちの言葉で話して」と苦笑いしながら答えたが、彼女はもっと私がみんなと一緒に話せるよう配慮して言ってくれたんだと思うと、気持ちが暖かくなると同時に、もっと頑張って中国語が理解出来るようにならないとな、と意気込んだものである。

その後、天候不順が続いた事などもあり毎朝の体操は自然消滅してしまったが、彼女たちとは会えば立ち話、

時には一緒に食事や買い物に行く付き合いが出来るようになった。ただ私の中国語力の拙さが常にスムーズなコミュニケーションの妨げになっているのは実感し、その度に中国語学習に奮起したものだ。

それから数年後、夫の転勤で中国の別の都市に引っ越した。武漢を離れる際には私の中国語力も少しはマシになってはいたが、それでもスムーズなコミュニケーションというには程遠いレベルだった。現在も中国語学習はもちろん続けているし、中国文化や中国社会への理解にも積極的に取り組んでいる。この全ての原動力は中国に来て間も無い、言葉も全く分からない私を暖かく仲間に迎え入れてくれたご近所さんによるものだ。

黎姐、恵娟、林姐、許姐、張老師、楊医生、劉老師、黄姐、感謝してもしきれない、生涯忘れることはないご近所さんである。非常感謝!

金丸 利枝 (かなまる りえ)

1970年福岡県生まれ。地元の大学を卒業後、会社員生活を経て、2012年に夫の転勤を機に中国湖北省武漢へ。その後2016年、夫の転勤により江蘇省蘇州市に滞在。2022年、再び夫の転勤により中国広東省広州市へ。地元の方との交流や大学での中国語課程などを通じて中国語を習得。2017年12月HSK五級、2019年12月HSK六級合格。現在は独学で広東語の習得に励んでいる。

「私の中国物語」その②

ロボコンの思い出 ―中国にて―

会社員 澤田 周作



IDC ロボコンでロボットの部品を作る筆者

私の人生最高の2週間の話をしたい。2017年、大学3年生の夏のことだ。

中国で開催されるロボコンに参加するため、2週間、中国の大学の寮に滞在させていただいた。それが初めての中国滞在だった。

ロボコンには日本、中国以外に韓国、シンガポール、タイ、アメリカ、エジプトの学生がいた。学生は複数のグループにランダムに振り分けられ、即席のチームでロボットを作る。私のチームは線の細い中国人、マッチョなシンガポール人、ノリのいい韓国人、そして私の四人だった。コミュニケーションはほとんど英語で行われ、たまに中国語が聞こえるくらいだった。私のTOEICスコアが600点にも満たなかったと言え、ロボコンでの悪戦苦闘はここに書くまでもないだろう。

現地に行く前の不安は大きかった。言葉だけでなく、

中国と日本の関係性ゆえに感じた不安は小さくなかった。準備をするにあたって神経質な母親は赤い服はやめた方がいいんじゃないかなどと言っていた。

不安は杞憂だった。とはいかなかった。言語に関しては。

開催場所が中国ということもあり、中国人と話す機会は多かった。彼ら自身がチャイナグリッシュと揶揄する英語は我々ののっぺりとしたジャパングリッシュに比べて恐ろしく速い。"more slowly"と何度お願いしたことだろうか。また、コンビニなどに行くとまったく英語が通じない事も多かった。のちに再び中国に行った際、本屋の店員に最初から中国語に翻訳した文章を表示したスマホ画面を見せたら"I can speak English"と言われコミュニケーションが取れたことに驚いてしまった。

しかし、言語に関係することも、関係ないことも、現地の人々の優しさのおかげですべて乗り越えることができた。中国人と思われて声をかけられることも多かったが、英語しか話せないと伝えると残念と言った表情をされるか、英語でコミュニケーションを続けてくれた。一度、どこ出身なのか聞かれたときはつい身構えてしまった。日本と答えた瞬間に相手の態度が豹変したらどうしようかと本気で思った。しかし、なんということではなかった。遠くから良く来たねと労ってくださった。まったく私は失礼な観光客である。

たった2週間のロボット制作にも休みはある。そこで中国人のスタッフがいろいろな場所に連れて行ってくれた。大変申し訳ないのだが、観光地のことはあまり覚えていない。メンバーたちとシェアサイクルで回った飲食店のことばかり覚えている。自転車の両脇を原付が通り過ぎるなか命懸けで行ったからかもしれない。屋台にも行ったしバーのようなところにも行ったしカラオケにも行った。

屋台では皿がビニール袋に入って出てきた。開けるのかと思ったらそのまま使うもので、開けてしまったものを交換してもらった。そこで中国の一人っ子政策に関して話を聞いたりした。自分の英語が不甲斐ないばかりに意見交換できなかったことが悔やまれる。

バーにはロボコン参加者のが多くが集った。なぜそうなったのかはわからないが大盛り上がりの末に店で踊っていた。今思い出すと迷惑じゃなかったのかと思わなくてもないが店員も踊っていたのでいいのだろう。他のお客さんとも意気投合していた。私は大量のコークハイボールを浴びるように飲み視界がぐるぐる回り始め、アメリカ人の参加者に水を飲むように言われた。下戸の私が人生で一番酒を飲んだ日だった。

カラオケでは音痴の私でも「ブルーバード」を歌うだけで盛り上がった。「NARUTO」ってすごいってばよ。他のアニソンや「嵐」の歌もウケが良かった。

ロボットの制作は経験豊富な中国人のメンバーとシンガポール人のメンバーがメインで進めてくれた。言葉が通じているのかも怪しい私にも仕事を割り振ってくれた二人には感謝するしかない。それでもプログラミングは私がメインで進めて無事ロボットを完成させた。

大会が終わり帰国の前日にお別れのパーティがあった。ここには書ききれないが、チームメンバーと陰湿なムードになったり制作がうまくいかなかったりと日本に帰りたい日の方が圧倒的に多かったはずだった。しかし、すべて終わってしまうと思出すのは楽しかったことばかりである。その気持ちはみんな一緒だったようで、日本に帰りたくない駄々をこね始める日本人参加者までいる始末だった。パーティ後に、またしてもバーに行き、明け方まで酒を飲み続けた。踊って笑って喋ってまたしても視界がぐるぐると回り始め寮に戻って、泣いた。

これが私の人生最高の2週間だ。たった2週間で私の中国に対するイメージは一変し、多くの友人ができた。SNSで繋がれるとはいえ、二度と会えないかもしれない友人たちだ。しかし、二度と会えなかったとしてもあの日々を共有したことは変わらない。

きっと、あの2週間で私の人生はいい方向に変わったと信じている。

澤田 周作（さわだ しゅうさく）

1996年東京生まれ。2015年に東京電機大学に入学。2017年にIDCロボコンに参加。翌2018年スタッフとしてIDCロボコンに参加。東京電機大学を卒業後、就職、転職。現在はエンジニアとしてモノづくりに関わっている。IDCロボコンの参加者とは現在も交流がある。

「私の中国物語」その③

椰子の島の卓球大会 ―海南師範大学職員卓球大会―

大学教員 大谷 美登里

「海南島に遊びに行こう！」「学生や先生に会いに行こう！」そう思って、私は海南島に「帰って」来た。5月7日から40日間の滞在予定だ。私を知る人たちは、予想以上に歓迎してくれ、毎日のように誰かに会って、一緒に食事をして、おしゃべりを楽しんだ。

その中で、最も印象的だったのは「海南師範大学職員卓球大会」だ。昨年の7月、私はこの学校を退職している。にもかかわらず、私は「外国語学院」の一員として、卓球大会に出場することになったのである。余談になるが、校門にあるゲートの顔認証がまだ有効だった。校内に用事がある中に入ろうとした時、もしかしたらと思ってモニターに顔を写してみると、自動改札のような扉が「ピロン」と音を立てて、開いたのである。海南島らしい「ゆるさ」だ。そう、海南島はすべてに「ゆるい」のである。だから、私が職員卓球大会に参加しても何の問題もない。

そもそも、この卓球大会は2022年の年末に行われる予定だった。当時、日本語主任の汪先生と私は、1時間100元の授業料を払って、コーチについて練習に励んでいた。しかし、楽しみにしていた大会は、コロナの感染爆発で中止となり、私にとっては「幻の大会」になってしまった。それがどうだろう、まるで私が来るのを待っていたかのように、この時期に開催されるというのだ。大会の二日前、汪先生から「申し込んでおきました」と言われ、驚き、ラケットを持ってこなかったことを後悔した。

大会に出場すると決まると、すぐに、チームのグループチャットが作られ、いろいろな連絡が入って来る。チャットに「外卖（出前）頼むけど何にする？」「マックにする？」「いいよ。」「ハンバーガーとコーラ2つずつお願い。」「誰が受け取るの？」と卓球とは関係ない話題が続き、なんで外卖？と思ってしまいが、「腹が減っては戦は出来ぬ」ということだろう。

この大会はリーグ戦だった。「外国語学院」「退職」「文学院」「教師教育学院」「教育学院」「機関」の6チームが参加した。5月17日から24日まで、夕方6時ごろから試合が行われるという。大会前、チャットに試合の予



海南師範大学職員卓球大会にて、外国語学院チームのメンバー

定表が送られてきたのだが、実際は、チームのリーダーがそれぞれ連絡して、試合をする日を決めたので、予定表は意味がなかった。

私たち外国語学院チームは私と汪先生、英語の呉先生とベトナム語の朱先生の4人で、チームリーダーは呉先生だ。17日の初戦「退職チーム」は強豪で、私たちは手も足も出なかった。

19日は3試合が行われ、大会の山場となった。「文学院」と「教育学院」との試合は、楽勝だった。ところが、3試合目の「教師教育学院」は手強かった。癖のあるサーブが返せない。どこに打っても返って来る。結局、肝心なところで失敗して、私は負けてしまった。しかし、呉先生、朱先生が勝利し、再び私の番が回って来た。次の人も上手い。やはり私は負けた。負けてもチームメイトは「没事儿，没事儿」と言って笑ってくれた。

22日の「機関」との対戦が最後の戦いとなったが、またしても私は負けてしまった。しかし、今回も呉先生、汪先生の活躍でチームは勝利した。

そして、24日の午後、「今日の6時半から閉会式があります。」という知らせが来た。6時前から、激しい雨が降って来た。海南特有のスコールである。海南島では時間を守るために、こんな激しい雨の中出していく人はいない。私も雨が止んでから部屋を出て、7時過ぎに会場

に着いた。中には結構人がいて、男子チームが試合中、空いている台では遊びで練習している人がある。我がチームメイトは誰もいない。所在なくしていると、呉先生がやって来て「練習しよう」と言うので、私たちは空いている台で練習をした。

1時間以上も打ち続け、疲れてそろそろ休みたいと思った頃、スタッフの「表演比賽」と大きな声が聞こえた。模範試合があるらしい。中央の台に、腕自慢のオジサンたちが登場して、試合を始めた。卓球台を大勢の観客が囲み応援する。素晴らしいプレーには歓声を上げ、「加油！」と言う声が飛び交う。見ごたえのある試合だった。その試合が終わると、表彰式になった。私たちのチームは3位、立派な額と賞金が授与され、卓球大会は幕を閉じた。グループチャットに送られて来たたくさんの写真を見て、私が「皆さん、ありがとうございました。いい記念になりました。」とメッセージを送ると、

みんなから絵文字のスタンプが送られて来た。

海南島の卓球人たちのプレーは自己流でめちゃくちゃ、格好は悪いのだけれど、ラリーが続く、そして、時々バシッとスマッシュを決めたりする。珍プレーを大いに笑い、いいプレーには「好球^{ハオチュウ}」と大きな声をかけ、お互いを称える。そして、勝っても負けても、みんな笑顔だった。

椰子の島の、明るくゆるい卓球大会が終わった。またいつの日か、優しい風の吹くこの椰子の島に「帰って来よう」と思った。

大谷 美登里（おおたに みどり）

1959年埼玉県生まれ。大学卒業後、埼玉の県立高校で、国語教師として38年間勤め、2019年3月定年退職。縁あって、海南省の海南師範大学に日本語教師の職を得、2019年8月海南島に渡る。コロナのため1年2ヶ月の日本待機を余儀なくされたが、2021年4月に大学に戻り、2023年7月まで外教として勤める。

「私の中国物語」その④

「驚き」を持って感じる日中交流

大学生 川鍋 直也



中文学部（中国語文学部）バドミントン部の活動において

「驚き」とはどんな時に抱く感情でしょうか？自分が思っていたことと、実際に起きることが異なっていた時などではないでしょうか。一人一人は自分のポリシーやルールを基準に物事を判断すると思いますがその「当たり前」が崩れた時にどのように振る舞うことになるでしょう？私が中国に留学に来てから良くも悪くも「驚く」ことがたくさんあります。しかし、その一つ一つの

経験が私に今までとは異なる思考を授けてくれ、固定概念を打破するための良いスパイスとなるのです。

私は2021年の11月に初めて中国に来ました。4月に私の在籍する大学に入学したものの、当時は新型コロナウイルスの影響により大学現地に渡航することは叶わず、オンラインで授業を受ける日々が続きました。規制の緩和により中国への渡航が解禁されると、同級生の日本人たちとともに自身初めての海外でもある中国に向かいました。飛行機が着陸し少々曇がかった空を見ながら始めて外国の地を踏んだ、あの時の気持ちは昨日のこのように思い出されます。そこからバスに乗って当時の水際対策のための隔離施設に向かう際、初めての衝撃を覚えました。入国審査を通過し、スーツケースをバスに詰め込んでから乗車するまでの間、スタッフと思われる人が特に詳細な指示を何も出さないのです。私としてはPCR検査をどのように行い、どこの隔離施設のホテルに何時間くらいで着くかを知りたかったのですが何も教えられませんでした。当時の私の語学力は日常会話さえ乏しかったのですが、スマートフォンはホテルに着いてから設定しようと思っていたため翻訳アプリも使うこと

ができず、近くにいた中国語を話せる同級生に状況を尋ねてもらいました。しかし、その場にいたスタッフもわからないと言うのです。その一連の出来事で初めて、日本にいたときのように計画を前もって把握し、その順序に基づいて行動するという事は通用しないのだと痛感しました。同時に国を隔てた人間性や考え方、習慣の違いを理解することの新鮮さに衝撃を受けました。その時は大きな不安を感じながらホテルまでの道を渡りましたが、後になってこの考えに基づく習慣は私にとって大きな意味を持つことだと納得しました。私は計画を綿密に練りそれに基づいて行動するタイプでしたが、この一件があってからもう少し心にゆとりを持ち、計画に不備があっても計画通りにいかなくても前向きに別の方法を考えてそのこと自体を楽しめるようになりました。このことにより、中国で送る留学生活も無駄に考えすぎることなくリラックスした心持ちで過ごすことができました。

また、日々における小さな「驚き」は無数にあります。中国語交流コーナーに参加した時に、共通の議題に対し多くの中国人学生が間髪を入れずに論理だった意見を発言している姿を見て圧倒されました。また、私が交流のある中国人は、私が興味を持つ様々なトピックに対して対等に話し合える博識さを持ち、その分野以外にも私よりも広い範囲の知識を持っていました。高校時代にバドミントン部だったので一緒にしようとなった時には、体育館の使い方を教えてくれることから学部のチームの練習に参加させてくれることまで優しく対応してくれました。私が意識して気づいていないだけで他にも毎日多くのささやかな「驚き」で満ちており、その一つ一つが私の留学生活を支える好奇心の源となっています。多く

の中国人は、私から見てハイスpekで優しく、勤勉さがあるといったようにどんどんポジティブなイメージにアップデートされていきます。そんな彼らと過ごせる時間を、私は事あるごとに夢のようなものだと感じます。

私は現在大学生活の半分を終え、北京に留学できる時間も残りはそう多くないという時期に差し掛かっています。これまでの時間を振り返ると、もちろんうまく行かないことや苦しいと感じることもたくさんありましたが、それ以上に中国での暖かいエピソードや自信を持つことができた成功体験が記憶の多くを占めています。それ程までに私に喜びを与えてくれた中国の地、そして中国人の友達たちに私は何の恩を返してあげられるでしょうか？もちろん日本に旅行に連れてきて案内するといったことができればよいでしょうが、そう簡単なことではありません。私は今、日本人の同級生と大学内で日本語を教える教室を設けようと準備を進めています。どんな形として実現されるか現在是不透明ですが、多くの中国大学生に「驚き」やワクワクをもたらして、もっと日本を好きになってもらえるような空間を作りたいと思っています。地理的な距離の近さや、文化的な類似点が多いことに日中の関わりがあるということにとどまらず、言語を通して考え方や日本人の奥深さの琴線に触れることができる体験を提供できるよう企画したいです。それこそが私が自らできる日中交流の体現化なのだと信じています。

川鍋 直也（かわなべ なおや）

2003年群馬県生まれ。高校3年生の時に、指定校推薦で北京外国語大学への進学のあることを知り、入学を志す。



中華人民共和国駐日本国大使館にて開催された第7回「忘れられない中国滞在エピソード」作文コンクール表彰式（2024年12月）。左写真は会議室にて、呉江浩大使（中央右）、森山幹事長（中央左）をはじめ、特別賞を受賞した舩添要一元都知事（左から3番目）、元卓球選手の福原愛さん（左から6番目）、神谷裕衆議院議員（右から2番目）らと撮影。右写真は出席者一同による集合写真。